

容貌に関する大学生の欲求と自己評価

○花屋道子 仁平義明

(秋田公立美術工芸短期大学) (東北大学)

Key words: 容貌、自尊心尺度、性差

<目的>

容貌は、その評価を通して他者の態度に影響を与え、本人の自己観、本人が想像する他者の反応に影響し、その具体的な行動を左右する。容貌についての大きな問題は、主観による容貌評価の幅が大きいことにある。そのため、自己の容貌へのこだわりは、身体醜形障害などの臨床例にみられるように、対人上、職業上の障害を招くこともある (DSM-IV)。こうした影響は、臨床例にかぎらず、一般にも比較的弱いかたちで存在すると考えられる。本研究は、非臨床的な大学生を対象に、自己の容貌評価はどのような次元を構成するか、容貌が全般的な自尊心にどの程度影響するか、また、容貌へのこだわりなど、身体醜形障害の症状の一部とされるような問題がどの程度非臨床例に存在するかを明らかにしようとするものである。また、そのような問題に性差や他の特性による差があるかを検討する。

<方法>

・質問紙：質問紙による調査。内容は、①容貌を構成する顔の 15 の要素への満足度、②身体各部へのこだわりや、それらによる対人関係などの支障の程度、③容貌の自己評価に影響されると考えられる全般的自尊心の水準 (the Rosenberg Self-Esteem Scale を使用) ④容貌改善 (歯科矯正治療、美容外科手術) への欲求の有無、など。

・調査対象者：宮城県内の国立総合大学の男女学生 137 人 (ほとんどが文系学部)、秋田県内の公立の美術系短期大学の男女学生 110 人、計 247 人 (うち女子 164 人、男子 83 人)。平均年齢は 19.1 歳 (SD1.3)。

<結果と考察>

・容貌評価の因子構造の性差

容貌を構成する 15 の顔の要素についての満足度評定 (5 段階) の因子分析を行った。その結果、男子にくらべて、女子の評価は、より分化し構造化されていることが明らかになった。男子では、「漠然とした容貌印象」「歯・唇の印象」「顔の中・上部印象」の因子が抽出されたのに対し、女子で

は、より分化した「顔の二次的特徴印象」「目を中心とした顔上部の印象」「歯を中心とした顔下部の印象」「プロフィール印象」の因子が抽出された。

・顔の各要素に対する不満感の性差

顔の各要素についての不満度の性差をみると、「顔の輪郭」「顔の各部分のバランス」で、女子の不満度が有意に高く、「横顔全体の印象」「鼻」について、女子の方がより不満を抱いている傾向がみられた。性差のみられたこれらの要素は、プロフィール特性との関連が示唆される。

・容貌へのこだわりと支障

容貌へのこだわりや、その結果としての対人関係や学業への支障には、性差がみられた。「自分のからだのうち、問題があると感じて、いつも気になってしかたがない部分や特徴がありますか」という問いに対して「ある」と答えた学生は、女子で 59.0%、男子で 42.7% と有意な差異がある。また、「からだのことが気になって、そのせいで、人前で引込み思案になったり、人間関係に支障がでること、あるいは、勉強や仕事などに何か支障がでること」が「ある」「ややある」と答えた割合は、女子で 61.0%、男子で 39.8% であった。

・変化欲求とその実現

このようなこだわりをもって、「からだの部分や特徴のどれかについて、“変えられるものなら変えたい” 気持ち」が「非常にある」とする強い変化欲求をもつ割合は、女子で 46.3%、男子で 21.7% と明確な性差がみられた ($p < 0.01$)。

変化のための方策として、「歯科矯正治療」を受けたいと少しでも思ったことのある学生の割合は、女子で 42.7%、男子で 31.3% と、全体として、かなり高い割合になっている。また、実際に治療を受けた (受けている) 割合は、女子 14.5%、男子 15.9% と、ほぼ同率である。「美容形成外科手術」を受けたいと少しでも思ったことのある割合は、女子で 29.9%、男子で 14.6% と、有意な違いがある ($p < 0.01$)。ただし、実際に手術を受けたのは、女子の 1 名のみであった。

・容貌評価と自尊心

自尊心の水準を測定する「the Rosenberg Self-Esteem Scale」は、オリジナルな得点方式ではなく、4 段階の評定をそのまま得点化し、因子分析を行った (主因子法、バリマックス回転)。その結果、「自己肯定」と「自己否定」の 2 つの因子が独立した自尊心因子として抽出された。自尊心がどれだけ容貌の自己評価によって影響を受けるか、この 2 つの因子得点をそれぞれ従属変数とし、15 の顔の評価要素を説明変数とする重回帰分析を行ったところ、「自己肯定」の重回帰係数 R は、.490 ($R^2 = .240$)、「自己否定」の重回帰係数は、.374 ($R^2 = .140$) になった。

このように、大学生では、女子の方が容貌の自己評価はより明確に構造化されており、容貌についても強い改善の欲求がみられた。また、大学生の全般的自尊心の水準が、容貌という外面的特性によってある程度の影響を受けていることが示唆された。

(HANAYA Michiko, NIHEI Yoshiaki)

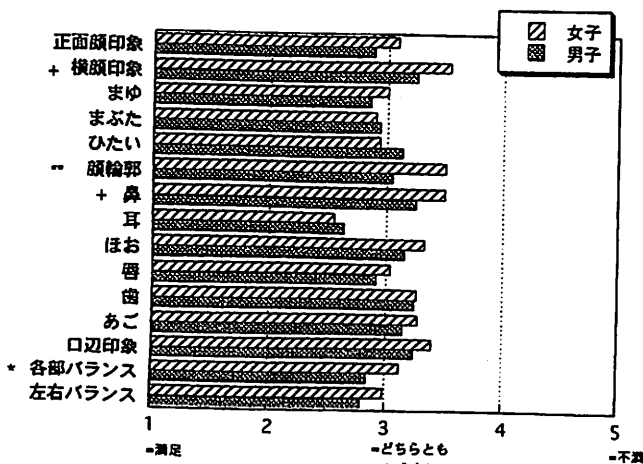


図1 自己の顔の各要素に対する大学生の満足度の性差 (性差 ** $p < .01$, * $p < .05$, + $.05 < p < .10$)